

音楽の裾野を広げた 『TBSこども音楽コンクール』の50年

伊藤 靖之 (TBS・WOWOW)



昭和44年小学校器楽合奏の部で文部大臣賞を受賞した船橋市前原小学校の演奏
チェロを奏しているのが現田茂夫さん(13ページ参照) 指揮佐治薫子先生

みん
な
の
こ
ど
も
音
楽
コ
ン
ク
ー
ル
5
0
年
民
放
史

題字
中川 順

日本の民間放送も誕生以来半世紀を過ぎ、開局50周年を祝う行事が各地で開かれている。私自身、昭和28年(1953年)、ラジオ東京(現TBS)の一期生として入社した人間で、感慨はひとしおのものがある。

50年を生きぬいたラジオ番組

この半世紀、TBSのラジオでも、社会の変化、新しいメディアの誕生、きびしい競争の中で数々の番組が誕生し、消えていった。今も心に残る名番組もあるが、時の流れには逆らえなかった。その栄枯盛衰の中で、ただ一つ、題名も変わらず、地味だが大勢の参加者や聴取者に支えられ、50年の間生きつづけ、これからもつづくであろう週一回の30分番組がある。『TBSこども音楽コンクール』である。

私はその四代目のディレクターだった。この番組は単に放送番組というだけではなく、コンクールそのものが、文部科学省および各県教育委員会の後援を得た演奏会で、小、中学校が音楽クラブ活動の成果を公に発表する場でもある。この催事の持つ意義が広く社会に

認められていることも番組の支えになっている。

年間を通じたコンクールで

大臣賞を目指す

この番組は、年間を通じて全国小、中学校の音楽クラブが、まず地域ごとのコンクール形式で公開録音を実施、一流の演奏家を中心とした審査員が評価する。土台になるのは学校単位の音楽のクラブ活動だが、合唱、合奏など12部門に分かれ、審査員の指導も受けて技を磨いていく。地元の公会堂で行われる公開録音の演奏会には、佳良、優良、優秀などの賞があり、優秀校の演奏は、各地域のJRN（TBSをキーとするラジオネットワーク）系列の局で毎週日曜日の朝オンエアされる。これが予選である。

年度末には、東日本、中部日本、西日本など全国7ブロックに分けられた地区の優秀校が一堂に集まり、生演奏のブロック決勝大会がある。最後に各ブロックトップの演奏をテープで審査して日本一を決めるという仕組み。

日本一の学校には文部科学大臣賞が贈られ、演奏を全国ネットで

放送する。この方式を毎年繰り返している。

今年2月22日、TBSは、社を挙げて50周年記念祝賀会をサントリーホールで開催、その一部はラジオとテレビで放送された。

この日の記念演奏のために総勢150人の「祝賀オーケストラ」が編成された。メンバーは全員がコンクール参加経験者で、市民オーケストラの有志は勿論、今は東京フィルハーモニーや大阪フィルで活躍しているプロ10数名もボランティアで参加した。指揮は現在日本の指揮者のトップメンバーの一人である現田茂夫さん。75歳の私もTBSを代表して第一バイオリンの最後列で奏かせていただいた。

曲目はシベリウスの『フィンランディア』。現田さんが千葉県船橋市前原小学校5年生の時、オーケストラのチェロパートを奏いて、見事文部大臣賞に輝いたときの記念の曲である。演奏が終わると万雷の拍手が鳴り止まなかった。私自身は本来技術屋だが、今もヴァイオリンを離さない音楽好きである。技術から制作に移って、ディレクターとして昭和38年から



TBSこども音楽コンクール50周年記念演奏会（2003年2月22日 サントリーホール）

7 年間番組を担当、丁度高度成長期で、番組のネット拡大や充実に微力を尽くすことができた。その私が、ここに一文を寄せることができるのは嬉しい。

そこでこの番組の長寿の秘訣を私なりに考えてみた。

300 人の大合唱、誰もが楽しめる 参加しやすいコンクールを

音楽は、小、中学校での情操教育の中で最も重要なものの一つであるが、そのクラブ活動を社会に発表する機会を提供したことが、この番組の命の源泉になったことは間違いない。番組も催事も最初から全国で展開していたわけではない。先生も生徒も家族もみんなが楽しめるイベントとして各地に広がっていき、一方これらの人々の期待にこたえたのが地元放送局でもあった。

NHK にも『全国学校音楽コンクール』という番組があった。これとどう差別化するか。NHK は公平を期すために、課題曲、参加人数などに指定があった。ラジオ東京は学校の実情を考慮して制限をゆるめ、参加しやすくしよう。曲は自由曲、人数もクラブ活動の



群馬県中里小学校橋倉分校＝山の中の分校。全校生徒14人による合奏(特別賞受賞)

生徒全員参加でもOK などなど。

これで学校側の重荷がとれ楽に
参加できるようになったと聞いている。その結果、40 人学級全員の
器楽合奏の中に車イスの生徒がい
る姿もたびたび見られた。全校生
徒300 人が参加した茨城県の小
学校の大合唱の光景は、今思い出
しても微笑ましい。

スポンサーも、丸善石油、ヤマ

ハ、東京電力とそれぞれの良さがあつたが、ヤマハのエレクトーンが登場した時には、オーケストラや器楽合奏で不足している楽器の補充に威力を発揮した。本格的な楽器編成や曲目のレベルアップを実現する大幅な進歩が見られた。

子供たちの目の輝きが芸術だ！

銚子五中の70 人フル編成のオーケストラが中学校器楽部門で全国一位になって、文部大臣賞(当時)を受賞した年があつた。その時はじめて、模範演奏をTBS ホールからテレビで放送したが、演出を担当したのは後にテレビマンユニオンを創った萩元晴彦だった。萩元君は私の同期生だ。

懸命に演奏する生徒たちの眼は先生の指揮棒に集中する。萩元のカメラは、その生徒たちの大きく見開いた瞳孔の中心にズームして追いつづける。指揮棒に食いつく瞳が大きく広がって、テレビの映像には音楽の輝き以上に生徒一人ひとりの瞳の輝きがあつた。

この作品を作った後で、萩元君は『「子ども音楽コンクール」は子供たちの目の輝きが芸術だ！』と言いつづける。以来、この伝説的な



瞳を輝かせて演奏する子どもたち

言葉を原点に、彼は番組でカメラワークの新しい領域を開拓する。同時にこの手法は、ラジオという分野では描ききれなかった制作の在り方に一石を投じてくれた。確かに、オーケストラだけではなく、合唱でも、生徒たちの瞳の輝きは、この番組ならではの清々しさと純粹さに満ち満ちている。

全国に展開するコンクール

前述したように、この催事は、TBSラジオのサービスエリアである関東6県から始まったものであったが、近隣の県の学校を刺激

し、地域を拡大して欲しいという要請が各地から寄せられるようになった。東京オリンピックの開催に伴い、小、中学生のクラブ活動に関する法令が改正された。以前は県外活動が禁止されていたクラブ活動の県外交流が認められるようになると、新潟や山梨などの学校がコンクールへの参加を希望してきた。特に音楽活動が盛んだつた新潟県見附中学校からは、県境を越えて群馬県の沼田地区予選に参加したいという嘆願書まで送られてきた。

私たちは早速、系列の新潟放送と話し合い、その年はとりあえず沼田市で受け入れ、翌年からは、新潟放送とTBSの共催で、正式に新潟県でコンクールを新設することで合意した。

こうした流れが全国に波及してコンクールの催事はJRN各局に広がった。

文部大臣賞はその名にふさわしく、日本全国でトップの学校(演奏)に贈られることになった。

この時、学校側の動きに素早く反応して、新潟に

見附市交響楽団演奏会



新潟県見附中学の器楽クラブが中心となって市民による見附市交響楽団が誕生した(昭和47年)

『BSNこども音楽コンクール』を新設した新潟放送には今でも感謝している。

これを契機に見附中学には器楽クラブの伝統が定着し、その後、このときのクラブ員を核とする市民オーケストラも誕生した。当時、クラブの部長を勤めていた飯田君は、今ではもう50歳をこえているが、新潟交響楽団の幹部で相変わらずコントラバスを奏でているという。

みんなの心が、

番組と催事の命を支えてきた

番組を支え、催事に参加してきたすべての人に共通する「心」の問題がある。「子どもを育てる」という一本の柱が、先生や親、更に制作者の心に通っていたと思う。その心が番組の長寿を支えている源だと私は確信している。

その「心」のことを一つの挿話で紹介したい。

昭和30年代、初期の審査員で、講師、指導に当たったのは教育音楽家といわれた先生たちだった。40年代から、演奏家であり芸術家でもある人びとが審査員になってくださるようになってきた。その中でも委員長格だった山田和男先生のエピソードである。

昭和43年のことである。当時、N響の主席常任指揮者だった先生は杉並区の住人だった。ある朝、N響の仕事で8時前に家を出た。阿佐ヶ谷駅に向かう先生が、途中、杉並第一小学校の前に差しかかる、朝の練習をしている小学生の『軽騎兵』の曲が聞こえてきた。そのトランペットの和音が合っていない。どうしても気になって、

足は音楽室に向かった。たまたま音楽指導の岩崎先生が用事で席を立ち、子どもたちだけで練習をしていた。山田先生は、譜面を読み違えてトランペットを吹いていた子どもたちに、正しいハーモニー

を手を取って教えてくれた。教室に戻ってきた岩崎先生は、山田先生とは顔見知りではあるが、直接には話もしたことがない。いきさつは分からないが、子どもたちがその大先生に手ほどきを受けている姿にビックリ。同時に感激して「職員室に聞こえてくる音で誤りは気づいていたのですが、それを先生に直して頂けるなんて」…。その年、杉並第一小学校は都内のコンクールで最高レベルの成績に達した。山田先生の子どもと音楽を愛する「心」の賜物である。

こう書きながら、岩崎先生が私に話して下さったその情景を思い出していた：7月26日深夜のことである。突然電話が鳴った。43年頃、早大生で、アルバイトでADをしていた工藤君からだ。子ども好きの工藤君は今も学習塾の先生をしている。電話は、たった今、懐かしく思い出していた岩崎先生が脑梗塞で亡くなったという知ら

せだった。絶句して、筆が止まった…

24時間後、再び筆をとる、

岩崎弘。享年74歳。杉並第一小学校の音楽指導にはじまり、社会的な音楽活動に一生を捧げた。

岩崎先生の熱心な指導。山田先生の音楽の深い造詣と子どもたちに注いだ愛情。今はめったに会わない工藤君からの岩崎先生の死を告げた緊急電話、いずれも、この番組が根幹にあつて積み重ねてきた人間関係の深さであろう。熱いものがこみ上げてきてとまらない。工藤君と連名で岩崎夫人に弔電を差し上げた。元ディレクターとスタッフの感謝をこめて。

アマチュア音楽の草の根運動

コンクールが育てたもの

50周年を迎えた『TBSこども音楽コンクール』。50年間に参加した小、中学生、教職員は合わせて300万人を超える。

子ども時代に身につけた音楽は一生の宝だと経験者は口を揃える。現在、音楽のプロになった人びとも、小、中学時代に、ほとんど全員がこの番組で経験を積んでいる。アマチュア音楽グループや音楽



リハーサル風景 中央は司会の山本文郎さん 右筆者

愛好者の数では、今や日本は世界有数といっても過言ではないが、各地で盛んなアマチュアの合唱や合奏グループも、番組の卒業生が主導して草の根運動のように音楽の裾野を広げていった。彼らは、同時に自らも音楽人生を楽しんでいると聞く。

音楽を愛する心の和み、平和な

文化を創り出す上で、この番組は大きな貢献をしていると私は確信している。

昭和35年、メイン司会者は山本文郎アナウンサーに代わり、その後18年間メインを続けていたが、30年代終わりのころ、小田原の公開演奏会で一人の少女に会った。

横浜市の港南中学の演奏団の一員だった。少女の名は吉川美代子。吉川さんは、このとき山本さんにインタビュースされたのがきっかけでアナウンサーを志し、大学卒業後TBSに入社した。

このコンクールが25周年を迎えた昭和53年、山本さんと交代して吉川美代子アナウンサーがメインを担当、現在に至っている。

吉川アナは、ご存知だと思いが、ニュースキャスターとしても活躍を続けている。

50周年の総合司会は山本、吉川のペアだった。ここにも、コンク



千葉県館山小学校の合宿に山本アナも参加、司会者と生徒が一体になる、こんな楽しい録音風景もあった(昭和40年)



50周年記念誌

写真提供 TBSラジオ&コミュニケーションズおよび筆者

ールが人間を育てた歴史がある。